〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(27)〉

アメリカ合衆国の保育事情・保育思想(2)

― 進歩主義教育思想の流れをくむ保育の思想 ―

塩崎美穂

アメリカの進歩主義教育

お茶の水女子大学の附属幼稚園（以下、附属幼稚園）で大切にされてきた保育の思想といえば、津守眞氏の指摘どおり[1]、それは倉橋惣三の保育観によく表されているでしょう。つまり、「フレーベルが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場とする」保育の思想であり、「遊びを中心とする幼児の生活の流れ」を守る決意の思想です。津守氏は、厳しい戦時体制下においてさえも「子どもの遊びを守る」保育が附属幼稚園で維持され得たのは、保育を守る倉橋の決意があったからだと述べています。

ここで津守氏が言及する「進歩主義(progressivism)教育」とは、十九世紀末から第一次世界大戦後にかけて、それまでの書物や教師を中心とした主知主義的な教育を見直す新教育（New Education）の運動の中、児童研究（child study）を苗床にアメリカ合衆国（以下、アメリカ）で展開された教育改革運動のことです。

進歩主義教育運動によって設立された進歩主義幼稚園（Progressive Kindergarten）では、アメリカの保育研究者のパティ・ヒル（一八六八―一九四六年）や、ウィリアム・ヒアド・キルパトリック（一八七一―一九六五年）が、ドイツのフリードリッヒ・フレーベル（一七八二―一八五二年）によって説かれた「子どもの自発性の尊重」や「遊び論」を踏まえながらも、恩物体系の形式的墨守や子どもの理解を超えた大人の恣意的な象徴主義に傾きがちであった「フレーベル主義」を批判し、フレーベル自身の思想に立ち戻ることを主張しました。

たとえばヒルは、今も世界中の子どもにうたわれる、"Happy Birthday to You" のもと（Good Morning to You）をつくり、「ヒルの積み木」と呼ばれる大型積み木を考案し、新教育や進歩主義教育のメッカであるコロンビア大学の附属幼稚園で「コンダクトカリキュラム」（導くカリキュラム）を作成しました。[2] 今でもヒルの積み木は世界各地の保育の場で愛用され、コンダクトカリキュラムの思想は、たとえば、イタリアのレッジョ・エミリアのプロジェクト・アプローチの実践（つまり今世界中の注目を集める新進気鋭の保育カリキュラム論）に息づいています。私たちが当たり前のものとしている保育（の思想）をよく見れば、そこここに進歩主義教育の影響が色濃く残っているのではないでしょうか。

倉橋惣三の見たアメリカと保育の思想

新教育運動の旗手、ジョン・デューイ（一八五九―一九五二年）が『民主主義と教育』を出版し、キルパトリックが『フレーベルの幼稚園の諸原理の批判的検討』を世に問うた翌年にあたる大正六（一九一七）年、倉橋惣三は、お茶大附属幼稚園にあった恩物を「他系列をまぜこぜにして竹籠の中へ入れ」[3]、子どもが自ら遊べる積み木の玩具として配置し直しました。これは、

子どもの生活から出発することで教育を改革する新教育運動の系譜に倉橋の保育思想を位置付ける有名なエピソードです。

ただし、倉橋が文部省在外研究員としてヒルやキルパトリックを訪ね保育を見学した際、彼が新教育（新保育）でさえ「型」になると指摘している点には、改めて注目してみる必要を私は感じています。進歩主義幼稚園を見た後、倉橋はこう言うのです。

「……率直にいえば、どこでも感服したとは言い難い。……（中略）時としては、「新保育」の型の中へ幼児がはめこまれているだけなのもあった。もちろんなる程これでこそと思ったところもあったが、それは必ずしも「新保育」にとらわれていない田舎の幼稚園などにかえって多かった。そして、そこでは、先生よりも幼児の方が主になって生活させられている……。」[4]

つまり倉橋は、進歩主義幼稚園で試みられていた保育（倉橋いわく「新保育」）よりも、子どもたちが能動的に活き活きとしている場にこそおもしろ味を感じ、「先生のプロゼクトよりも自分たちのプロゼクトで遊んでいる」子どもに目を留めています。倉橋の「誘導保育論」の背景にあったといわれるアメリカの進歩主義幼稚園やコンダクトカリキュラム[5]は、しかしそのままの形で取り入れられたのではなく、たとえ「新保育の型」であってもそこへ子どもをはめこむようなことがあってはいけないという倉橋の保育の思想となって日本へたどり着いたのではないでしょうか。『幼稚園真諦』（倉橋惣三文庫①　フレーベル館）の最後ではいみじくも、「（この本は）近頃宣伝される新保育でも、輸入保育でもない」と、倉橋自らが言っています。

そう考えると倉橋は、新保育の内容や方法を「型」として輸入したのではなく、新保育運動を駆動する保育の思想を同時代的に実践したものと考えられます。

目の前にいる子どもの生活から保育を改革し続ける新保育の思想を、倉橋は、附属幼稚園で実践したのでしょう。

今も附属幼稚園では、「子どもの生活から」出発する保育がなされ、子どもたちの遊びが豊かに展開しています。それは、子どもの生活の変容をとらえながら、日々の保育を生成しようとする進歩主義教育の流れをくむ保育の思想に通じる実践であり、また「子どもの遊びを守る」という倉橋の決意を受け継いでいる保育であろうと思われます。

津守氏の渡米とその後の保育研究

倉橋がヒルやキルパトリックを訪ねた一九一九年からおよそ三十年後、一九五一年、敗戦の混乱を乗り越え戦後民主的教育が模索される日本をあとに、今度はお茶の水女子大学（以下、お茶大）から津守眞氏が渡米します。倉橋のように津守氏もまた、アメリカの進歩主義教育思想に出会っています。留学中、ミネソタ大学のInstitute of Child Welfare（子ども福祉研究所）で、彼は進歩主義や新教育の流れをくむ保育思想の変遷を研究し論文にまとめました。ミネソタ大学の附属幼稚園（前号で筆者が来訪した、現在のラボ・スクール）で子どもの遊ぶ姿に励まされながら新教育の思想について考えること一年十か月、津守氏は一九五三年に帰国し、お茶大に復職します。家政学部児童学科の附属幼稚園内にある研究室で、「幼児が一日中遊ぶ姿の中に幼児教育がある」というアメリカでの学びに伴走されながら、お茶大での保育研究が再開されました。[6]

しかし彼の帰国後、アメリカの保育・教育界は転換の時代を迎えます。一九五五年、アメリカの進歩主義教育協会は解散し、「子どもの活動を中断して遊びの実験場面をつくり、教育効果のあがるプログラムを作ろうとする研究が主流」になります。津守氏が、ミネソタ大学の附属幼稚園を二十年後（一九七四年）に再

訪すると、「知的教育のプログラムがなされていて、幼児の活動はこまぎれ」で、「そこに身をおくことに耐えず早々に辞去」するような保育が展開されていました。ところがその十年後の一九八五年、愛育養護学校の保育の実践にすでに忙しくなっていた津守氏が同じ保育の場を訪問すると、「プログラム教育から脱し」、「戸外で水たまりに木の葉を浮べて子どもたちが遊んでいる」保育がなされ、職員室の書棚には「進歩主義教育時代の書物が並んでいた」そうです。[7] アメリカの保育実践が変化していく早さには、驚かされるばかりです。

今回、二〇〇七年にミネソタ大学のラボ・スクールを私が訪問したときには、戸外に「がまくんとかえるくんの流れ」の小川がつくられる、のびやかな保育が実践されていました。ただ、保育の充実が社会的格差是正に向けた国家的使命としてアメリカで叫ばれ始めた今、言語教育などの知的プログラムに多くの時間が割かれていることもまた明らかでした。進歩主義教育思想とアメリカの保育は、短いアメリカの歴史の中でも、このように多くの紆余曲折を経て今に至っています。津守氏の保育実践・保育研究が、アメリカの進歩主義教育思想の影響を受けながらも、日本の保育や教育の現状に合わせて展開されてきたことの歴史的意味については、改めて考えてみたいと思います。

アメリカの教育実践の現在から

私の今回の渡米目的は、リベラルな政治風土で知られるミネソタにおいて、現在どのような中等教育段階の市民教育実践（Public Achievement、いわゆる「シティズンシップ教育」）が行われているのかを視察することでした（広田照幸代表、科研費基盤研究B海外視察）。訪問したミネソタのアヴァロン高校（Avalon School）では、カリキュラムを学問体系からではなく市民生活から出発させる学びを大事にする実践が試み

られており、これはもちろん、デューイ以来の進歩主義教育思想の流れに位置付く教育実践です。

そこでは、教師と生徒の対面式の授業はごくわずかで、机を円く囲んだゼミ形式の学び、二〜三人の生徒が教師らしき人の周りに集まって話しをしている学びなどが主に見られました。生徒の自主性に任されたこうした学びの雰囲気は、子どもが「自ら」であることを大事にする保育の場によく似ていました。

進歩主義教育の流れをくむ保育の思想は、「子どもと一緒に過ごす生活を、それが何に役立つかを問わずに、その現在が子どもにとって楽しいものであってほしい」[8]という保育・教育の思想とともに、日本でもアメリカでも、徐々に積み重ねられているように思われます。そう考えていくと、デューイ研究者であり、レッジョ・エミリアのプロジェクト・アプローチを日本の保育界へといち早く紹介した佐藤学氏が、愛育養護学校の実践に注目することの意味もまた明らかでしょうが、これについては今後の課題にしたいと思います。[9]

（お茶の水女子大学　幼保プロジェクト　専任講師）

注

1 津守眞「私が幼児教育を志した頃(7)」『幼児の教育』第九十九巻第五号（二〇〇〇年五月）十五頁
2 主に岩崎次男「新教育運動における幼児教育思想」青木一ほか編『保育幼児教育体系第5巻　保育の思想』一九八七年、労働旬報社、参照
3 倉橋惣三／著　津守真／編　森上史朗／編『倉橋惣三文庫2　子供讃歌』フレーベル館、二〇〇八年、九十五頁
4 同前、九十九頁
5 加藤繁美『対話的保育カリキュラム（上）』ひとなる書房、二〇〇七年、一九三〜一九四頁
6 津守眞「私が幼児教育を志した頃（最終回）」『幼児の教育』第一〇〇巻第十二号（二〇〇一年十二月）
7 同前、二十八頁
8 津守真　ＮＨＫブックス五二六　『子どもの世界をどうみるか―行為とその意味』日本放送出版協会、一九八七年、一六六頁
9 佐藤学／監修、津守真・岩崎禎子／著者代表『学びとケアで育つ―愛育養護学校の子ども・教師・親』小学館、二〇〇五年